〔通信欄〕

学問・思想・政治

米谷恒春*

この文は，志尾氏の“70年代の気象学のあり方についての読後感”の読後感である．筆者は，氏とは見解を大いに異にするのであるが，先づ，氏の文の論理上の誤りを指摘しておく．

学問の場を，政治活動から隔離しておこうとするならば，あるテーマが学問としてふさわしいかどうかの判断基準に，政治的色彩の強さを採用してはならない．なぜならば，もし政治的色彩の強さを判断基準とするならば，政治を学問の場に持ち込まねば，判断できないからである．学問を，政治活動から自由にしておこうと意識することが，逆に政治活動によって束縛されることになるのである．もし本当に，学問の場を思想・政治活動の聖域にしようとするならば，そこで思想・政治を論じてはならない．ある研究テーマが気象学の研究課題としてふさわしいかどうかは，純粋に，気象学の枠の中で論じられなければならないのであって，政治的色彩とか年齢とかによって論じてはならない．このことは当然のことと考えられる．しかるに志尾氏は，「いかなる政治的，思想的利用にも，気象学をさらしてはならない．」また「社会的状況を忘れるべきである．」と主張しながらも，公害問題を気象学の場で取り上げようとすることの反対理由には，「政治的色彩の強さ」と「流行課題の追従である」という，二つの「政治的理由」と「社会的状況」以外の何ものもあげていないのである．まさに，思想によって，氏の言葉を借りれば，「他の研究を防害」しているのである．ここに，氏の文は，破綻をきたしている．

思想は，一つの判断基準である．人が何か行動を起こすとき，その根幹に横たわっているものである．それ故，確固たる思想を持っている人の行動は，外部環境に左右されることはない．その人の持っている思想が不安定であればあるほど，行動は，思想の不安定さに比例して，外からの影響を強く受ける．したがって，まったく思想を持っていない人の行動は，外からの刺激に対する反射そのもの——それが迎合であれ，反発であれ——になる．

人の政治活動も，当然思想に基づく活動である．政党に属するから同じ思想を持つのではなく，同じ思想を持つから同じ政党に属するのである．人の政治活動は，思想によって決定されるのであって，決して政治活動によって思想が彩られるのではない．（もっとも，我れ我れは，言動によってその人の思想を知るのであるが，時々決定的に判断し，レッテルを貼ってしまうという誤りを犯しがちであるが．）人は，思想に基づいて行動するから．学会での言動も，当然のことながら，思想を通じて，その人の日常活動との関連を見い出せるはずである．学問の場でも，何を研究テーマに選ぶかは，思想の影響を受けることであろう．

このように，人間のあらゆる分野における行動の本に，思想があることを認識し，さらに，その思想に則って行動することを当然とすれば，政治を学問の場に持ち込むことの心配は，意味の無いことになる．すなわち，我れ我れは，一つの確固たる思想・哲学を持つべきであり，さらに，いかなる場合でもその思想に則って活動すべきである．そして，このことによってのみ学問の自由が保たれるのではないであろうか．

我れ我れは「基礎学問は重要である」という言葉を，耳にし，口にするが，一体何故口にするのか？　何故口にしなければならないのか？　少なくとも基礎研究に従事している研究者は，基礎学問の重要性を充分認識していると思われるが，その重要性は，人間が生活を営んでいる社会と，なんら関連の無い事であろうか？　それぞれの専門を離れて，一介の人間として，我れ我れは学問に，一体何を期待しているのか？——例えば農民は，その生活の基盤が気象の影響を受けるから，気象の専門家に，気象の的確なる予報を，要求するであろう．例えば我れ我れは，健康を害した時医者を訪ねるが，それは医学を修めた専門家である医者が，診察をし，判断を下し，それから調合してくれた薬を飲めば治ることを信じているからである．例えばコンビナート建設が予定され

* T. Yonetani 国立防災科学技術センター

た周辺の住民は，もしそこにコンビナートができた場合，環境がいかに変化し，住民はどのような影響を受けるかを，学者に問いかける．人々が気象学者に問う事は，「昨日，どうして雨が降ったか？」では無くして，「明日は晴れるか？」である．患者が医者に問うことは，「どうして病気になったか？」ではなくして「どうすれば治るか？」である．人々が学者，専門家に問うことは，知恵のつきかかった子供がよく発する「どうして？」ではなく，それの予測であり，「こうなればどうなるか？」さらに進んだ「こうするためにはどうすべきか」ということである．そしてこのような問に対して，専門家・学者から，正しい答が得られるのは当然と考えられている．なぜなら，専門家・学者とはその分野について深く学んだ人を言うからである．すなわち，学問とは，過去の現象を説明することによって己の知性を満足させるためのものではなく，未来を正しく予測することによって行動の指針を与えるべきものなのである．

気象の理論家・基礎実験家との意識を強く持たねばならないことは当然である．しかしその意識の下層に日本人であること，人間であること，地球上に棲息する特異な生物である，という意識を持っていなければならない．もし，我れ我れは全て同じ人間であるという意識を持たずして，自分は気象学者であるという意識しか持たなかったならば，その意識は自負以外の何物でもなく，気象学は形骸化され，ただ単に知的興味の対象以上のものにはなり得ず，学問の名に値しない一部人間のおもちゃになるであろう．学問は全て人間の共有物であり，人間社会と密接な関係があるにもかかわらず，社会状況を無視し社会から有離した閉鎖社会を作る傾向があるからこそ，研究者は社会的状況を忘れてはこまるのである．多くの物理学者が学問の場以外でも，社会状況を考え思想に則り活動している．それは，原子物理学のある部分の発達がまたは学問のゆがめられた使用が原子爆弾を生んだという事実によって，科学本来の性格——科学の対象は，日常生活において，直接，感覚的に与えられるものから，ますます大きく離れてゆくように見えた．しかし，それは遠ざかってゆく一方ではなかった．遠くへ行けば行くほど，大きな成果を手に入れて人間世界へ戻ってくるという，科学本来の性格は，失われていなかった（世界の名著；現代の科学Ⅱ，p. 88）．——を強く意識しているからではないであろうか．学問することが必らずしも人間へ幸せをもたらすとは限らない，ということを強く意識しているからではないであろうか．そして“70年代の気象学のあり方”なる特集が組まれたのも，このような時代性を反映した結果ではなかったのであろうか．

（1972年2月）